



— 巻 頭 言 —

学会の「見える化」とは

日本核医学技術学会 事務局長, 庶務理事, 組織検討委員長 横 野 重 喜

病院情報の「見える化」は、経営的にも職員満足にも奏功するといった話題について、種々の病院の事例を紹介した雑誌を読む機会があった。そもそも「見える化」とは、多くの情報を関係者にさらけ出し自分たちの仕事の質や量、他病院との比較値（ベンチマーク）を客観的に認識できるようにすることが目的である。企業であれば「見える化」は当然であり、売り上げに対する原価率はもちろん、個々の商品が企業にどの程度の収益をもたらしているか、また顧客の評価はどうかなどを知ることは、基本中の基本といえる。しかし、病院という企業は、果たしてどの程度まで「見える化」を達成しているのだろうか。種々の情報は、公開することである部門の職員の士気が下がる場合があったり、収益性は劣るが病院に存在する必然性がある場合など、院内とはいえ公開になじまないとの議論もある。

さて、この「見える化」を学会に当てはめて考えることはいささかの外れている感もあるが、情報を会員が利用しやすい形で公開することは学会の持つ使命ともいえる。会員が学術大会やセミナーに参加することで自主的に情報を得て、研究や臨床にフィードバックすることこそが学会の存在意義ともいえよう。しかし、もう少し分かり易く情報の集約されたものが分野ごとのガイドラインというならば、やはり学会としての情報の「見える化」とは、まとまった形のものを作り、それを全ての会員に提供するということになるのであろう。本学会においては、これまでに PET の撮像法等や放射性医薬品を投与された患者のオムツ等の取り扱いに関するガイドラインも公開されており、現在、放射性医薬品の取り扱いに関するものの作成が進行中である。会員の皆様には、本学会のホームページからガイドラインを是非とも再読いただき、品質保証された核医学診療の実施をお願いしたい。

一昨年から昨年にかけての不安定なモリブデン供給に端を発した“核医学離れ”は、安定供給となった今日においても以前の姿を取り戻していないといわれているが、このような時期こそ品質管理の行き届いた核医学画像の提供に努力を惜しむべきではない。会員の皆様の協力をいただきながら、これまでも増して、情報の「見える化」を推進することがますます重要になってきたのではないだろうか。